

私は薬剤師

聴覚障害のハンディを乗り越えて

杉原 都さん（岡山県井原市）





杉原都さん。福山大学薬学部生物薬学科を1999年3月に卒業。同年薬剤師国家試験に合格。岡山県聴覚障害者福祉協会井原支部会員。インターネットを通じて、外国の人たちとメールのやり取りをするのが趣味。「休日は？」「寝ています」



杉原さんが勤務する薬局 有限会社井原調剤センター いばらセンター薬局（大山進薬局長）
〒715-0019 岡山県井原市井原町1205-5 TEL 0866-65-1678 FAX 0866-65-1677

岡山県井原市の「いばらセンター薬局」の薬剤師・杉原都さん（二六歳）が、処方箋を見ながらテキパキと仕事を進めている。

薬を調合し、一回分ずつ袋に詰める。また、たくさんの薬剤が並ぶ棚から、必要な薬を取り出し、何度も確認したあと、同僚の手を経て患者さんたちに渡されていく。笑顔で活発に働く杉原さんと、直接会話することがなければ、彼女が聴覚障害者と気付く人はいないだろう。

杉原さんは、一歳を過ぎた頃から先天性難聴と診断され、以来、補聴器を使用している。幼い頃から、地域の関係施設で口話や発音訓練を受けた。両親が共に薬剤師だった杉原さんは、小学校四年生の頃から職場を何度も訪れ、両親の働く姿を見て育った。自然に両親と同じ薬剤師になりたいと思いはじめたが、本格的に考えたのは高校二年の時だった。

当時、薬剤師法でも、目が見えない者、耳が聞こえない者、口がきけない者に免許を与えない——という欠格条項があった。幼い頃から常に杉原さんの最大の応援者であったお母さんは、彼女の薬剤師になりたいという希望をかなえようと、関係者に相談したり、当時の厚生省に「耳の聞こえにくい者でも薬剤師になれるのか」と問い合わせたりした。

その時の厚生省の「薬剤師になれます」との返事は、希望の光であった。

しかし、大学受験も、入学してからの授業も大変だった。講義で先生の話が聞こえないため、友人たちのノートを借りたりして勉強したが、難しいことばかりだった。

「九〇分の講義を録音したら、私が書き起こす」というお母さんの提案で、卒業までその作業が続いた。一日に四〜五科目の講義があり、大変な作業の連続だったが、こうした努力が実って、国家試験も一回で合格し、念願の薬剤師となった。

二〇〇一年に『障害に係る欠格条項の見直し』が行われ、これからの若い人たちは、頑張れば、なりたいた職業人になれる。受け入れる大学も、入った後の環境づくりとフォローアップがあってほしい——少しは、いい世の中になったかな？ と思いたいから」と杉原さんは期待を込めて話してくれた。



聴覚障害の患者さんに手話で説明したとき「薬のことがよく分かり、安心して飲むことができるよ、ありがとう」と言われ、薬剤師になってよかったと思った。もっと薬の勉強をして、地域の皆さんに安心して薬を飲んでもらえるよう頑張りたい



「障害に甘えることなく、責任のある仕事をして聴覚障害者への理解を得ることが大切」と言う杉原さん



薬歴（患者の薬のカルテ）の整理



まちがいをなくすため、必ず2人以上で確認して作業を進める



在庫チェックなど、あらゆる仕事に積極的な杉原さん





自宅からマイカー通勤



「コミュニケーションはあまり問題ないです。どんどん会話に入ってきますし、聞いてくる。明るいキャラクターもいいですね」と大山薬局長(右)の杉原評だ



吉備職リハ(注)、市内の小学校と、さまざまな所で自分の体験を手話で話す杉原さん(写真提供：杉原さん)



「あなたが薬剤師をめざすためなら、何だってしてあげる。母さんが辛そうだななんて思っんじゃないよ。途中でやめるなんてことはしないから。あなたは、自分の勉強を頑張って」といつも応援を続けたお母さん(右)と自宅で話す都さん。「本当に母の協力のお陰です。感謝でいっぱいです」

(注) 国立吉備高原職業リハビリテーションセンター
〒716-1241 岡山県上房郡賀陽町吉川7520 TEL 0866-56-9000 FAX 0866-56-7636